九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

第5回福岡統合医療研究会

https://doi.org/10.15017/18597

出版情報：福岡醫學雜誌. 97 (10), pp.308-309, 2006-10-25. 福岡医学会
バージョン：
権利関係：

福岡医誌　97(10)：308－309，2006

集　会　報　告

第5回　福岡統合医療研究会

平成18年7月20日（木）午後6時30分より，第5回福岡統合医療研究会が，九州大学医学部百年講堂で開催されました．今回のテーマは現在わが国で増加傾向にある糖尿病で，特別講演Ⅰでは糖尿病の薬物療法についてお話頂き，特別講演Ⅱでは糖尿病と漢方治療についての2席の講演が行われました．座長は九州大学医学部保健学科病態情報学の永淵正法教授にお務め頂きました．以下に，講演者より提出された抄録を掲載致します．

代表世話人　林　　純

特別講演Ⅰ

「糖尿病の薬物療法」

福岡大学病院血液・糖尿病科（第一内科）　安西　慶三

現在経口糖尿病薬にはインスリン分泌促進薬であるスルホニル尿素（SU）薬，速効型インスリン分泌促進薬であるグリニド系薬，インスリン抵抗性改善薬であるチアゾリジン薬・ビグアナイド薬，糖質吸収抑制薬であるα-グルコシダーゼ阻害薬など患者の病態に応じて種々の薬剤がある．2型糖尿病の治療戦略は，患者個々に対して食前血糖，食後血糖を意識して具体的な血糖値の目標を立てて，いつまでに達成するかの時間軸を決める．その際の薬剤選択はインスリン分泌不全とインスリン抵抗性のいずれの病態が主体であるか，また食後高血糖と食前高血糖のどちらを目標にするかを考え薬剤を選択する．その基本となる治療概念は糖尿病の進行とともに低下していく膵β細胞細機能を守ること，インスリンの基礎分泌・追加分泌を考え生理的なインスリン分泌動態を再現すること，さらにインスリン抵抗性の改善にある．特にSU薬は膵β細胞機能が保持されている初期は確実な血糖効果作用があるが，膵β細胞が低下した時期ではその効果は少なくむしろ膵β細胞機能をさらに疲弊させるため，血糖コントロール不良例に漫然とSU薬投与を継続せず，早い段階でインスリン治療に切り替えるべきである．膵β細胞機能が残存している時期であればその後インスリン離脱も可能である．また薬物の2次性無効例に対しては確実な服薬が実行されているか，食事・運動療法が守られているかを見直すことも重要である．

特別講演Ⅱ

「糖尿病と漢方治療―神経障害に対する牛車腎気丸の有用性―」

愛知学院大学心身科学部健康科学科　佐藤　祐造

現在我が国には糖尿病患者が740万人，その95％は2型糖尿病である．

我々は牛車腎気丸が糖尿病神経障害の治療に有用であることをすでに報告している．また，最近2型糖尿病にみられるインスリン抵抗性の改善に有効であるという臨床成績を得ているので紹介する．

1．牛車腎気丸と糖尿病性神経障害

糖尿病神経障害患者80症例に牛車腎気丸を12週間以上を投与したところ，しびれに対しては，65症例中66.2％の有効率であった．全国集計成績（554症例）によっても，しびれには67.3％の改善率であった．

メコバラミンとの比較試験を実施した．しびれに対しては，牛車腎気丸群の改善率は69.8%とメコバラミン群の37.1%より有意に大であった．

2．牛車腎気丸とインスリン抵抗性

1） 動物実験成績

牛車腎気丸はSTZ糖尿病ラットのインスリン抵抗性を改善させることを正常血糖クランプ法を用いて証明した．そのメカニズムとして，NOおよびインスリンシグナル伝達系が関与していることも明らかにした．

2） 臨床研究成績

2型糖尿病患者71例に牛車腎気丸を投与したところ，空腹時血糖が180→167 mg/dlへと有意に低下した．インスリン抵抗性指数（HOMA-R）も4.8→4.0へと有意に改善した．

以上の結果は漢方薬（牛車腎気丸）が糖尿病合併症の治療，発症，進展防止に有用なだけでなく，糖尿病の治療，予防にも有用であることを示唆している．

―総括～特別講演，パネルディスカッションから，糖尿病の薬物療法を考える～―

今回は，「糖尿病の薬物療法」のテーマで，福岡大学糖尿病内科の安西慶三先生は，経口糖尿病薬の使い方について，患者さんの病態，特に，食前，食後血糖，インスリン分泌不全，インスリン抵抗性，などを評価し，膵β細胞を出来うる限り疲弊させない治療の選択をおこなうべきであるとの論点で，分かり易く，具体的な症例も呈示しながら，お話されました．さらに，愛知学院大学の佐藤祐造先生には，糖尿病の漢方治療について，神経障害に対する有効性が確立されている牛車腎気丸を中心に，科学的あるいは臨床的な根拠となる研究成果を呈示しながら，その有用性について，講演して頂きました．お二人の演者の先生から，糖尿病臨床においては，それぞれの症例の病状・病態に合わせて，幅広く柔軟，かつ適切な対応することの必要性が，改めて痛感させられました．今回の研究会が，参集された先生方の糖尿病臨床に生かしていただけることを期待致します．

当番世話人　永淵　正法